

## 滋賀県における今後の環境学習のあり方（答申案）への意見反映の整理

## ○ 8/2 環境企画部会での意見に関して、8/30 環境学習小委員会での答申案の検討結果

該当箇所	意見	答申案への反映の考え方
P. 3 (松井委員)	・ ESD (Education for Sustainable Development) の略として、「持続可能な開発のための教育」とあるが、これは、どこでもこのように言われているのか。「持続可能な社会づくりを目指した環境教育」は、非常にわかりやすい見方をしていると思う。	・ 「持続可能な開発のための教育」は正式な表現。ただし、本文中では、「持続可能な社会づくり」を目指す学習と言い換えている (P. 3)。
P. 4 (笠原委員)	・ 「持続可能な」というのはどのぐらいまで先のことを考えて「持続可能」と言っているか。それによっても取り組みに違いが出てくるのではないか。「世代間」ということで、2代あるいは3代ぐらいまでを考えればよいのかもしれないが、これからの将来の世代が、私たちがこの環境を享受したのと同じような環境を保つためには、おそらくもっと先まで考えて活動していかなければならない。	・ 2030 年の滋賀社会ビジョンを想定 (P. 4)
P. 5, 7, 8, 11 (清水委員)	・ 滋賀県なので琵琶湖というのは前面に出てきているが、つながりという意味では、上流（流域）の部分がかもう一歩見えないう。	・ P. 5, 11 に「やまのこ」を追記 ・ 「特に滋賀県では、琵琶湖と流入する河川、その源である森林とのつながり、また、琵琶湖とその下流の府県といった流域としてのつながりを意識することが重要になります。なぜなら、琵琶湖淀川流域の上流に暮らす私たちの水の使い方ひとつで、その影響が下流域の生き物や水質に現れ、ひいては下流域に暮らす全ての人々の生活にも影響を及ぼすかもしれないからです。」を追記 (P. 7) ・ 「琵琶湖の源流にある森林を保全することも、木材供給や水源のかん養のためだけでなく、地球温暖化の防止などの地球規模の環境問題の解決に大きく寄与しています。」を追記 (P. 8)
P. 6 (菊池委員)	・ 何をすれば環境学習なのかという議論を反映し、総合的な複雑性にどのように向き合うのかということ、素案の中でも検討していることを触れたほうがよい。	・ P. 6 に環境学習を説明
P. 6 (森澤部会長)	・ 「滋賀の環境学習で大切なもの」の『「つながり」を意識し深める」という部分で、文章の中では「世代を超えた関わり」という文言が出ているが、キーワードとして、「世代間のつながり」が項目としては挙がってきていない。「世代のつながり」というのをここで挙げてこないものか、再度議論を。	・ P. 6 「「世代のつながり」を深めるために、場のつながり、人と人のつながり、課題のつながり、主体のつながりを意識し深める。」とし、「世代のつながりを深める」の項目を追加。
P. 7 (上野委員)	・ P. 7 の「人と人とのつながり」の中で、「核家族化、地縁・血縁の希薄化の中で」とあるが、希薄化している状況の中で、世代間を超えて地域から学びあうために、古老、親子間や三世代と一緒に参加できるプログラムは、果たして可能なのか。	・ 都市化等の社会状況の変化により、一般的に核家族化、地縁・血縁の希薄化の傾向はあると思われるものの、東日本大震災後、家族や親戚とのつながりを大切に思う意識も高まっている時期に、世代のつながりを意識したプログラムを行うことで、つながりを再生していくことが大切と思われる。
P. 7, 10 (西野委員)	・ 発達段階に応じた環境学習が大変重要。実際、環境学習して効果があるのは、子ども。大人については、特に年配の方は環境保全について興味を持ってもらえる。「世代を超えたつながり」と言ったときに、発達段階に応じた環境教育のあり方をもう少し検討していただくということ。特に高齢者の方と次の社会を担っていく若者とのつながりが大切で、その一つの試みとして、世代間の交流。	・ ライフステージに応じた環境学習の必要性は、場のつながり (P. 7) に記載 ・ 世代を超えたつながりは、P. 10 に記載

P. 8 (西野委員)	・子どもに環境を守ると言ってもなかなかわかってもらえないが、例えば食と関連させると興味を持ってもらいやすい。滋賀県では「おいしが、うれしが」キャンペーンをやっており、食とのつながりをもう少し書き込めないか。	・「滋賀県では、食品販売事業者等が協働して、地産地消の考えのもと「おいしが うれしが」キャンペーンが行われています。また、琵琶湖にやさしい環境こだわり農業が進められており、その農産物を利用した食育も学校教育の中で進められています。」を追記 (P. 8)
P. 9-10 (清水委員)	・「地球規模の視点から世界や世界の人々とのつながり」と書いてあるが、実感としては遠いもの。地域で環境学習をして、地域のいろんなところをつなげて、それを地球規模で理解してもらうためには、おそらく「コーディネーター」ではなく、「ファシリテーター」を育てていくのが一番重要。	・「実践をファシリテートするリーダー」と記載ファシリテーターは、本文中ではリーダーの役割に含めている (P. 9)
P. 13 (西野委員)	・理念をどう具体的にしていくかという仕組みづくりといった部分についてももう少し書き込めないか	・「何より、環境学習に関わるあらゆる主体が、この答申の理念を実現するために、何ができるのかをそれぞれの立場や分野において考え、実践し、さらには協働・連携していく努力を求めます。」を追記 (P. 13)
P. 13 (菊池委員)	・既にある環境学習拠点というものをどのような形で質を高めていくのか。そして、それらを利用していくということもきちんと文書の中に組み込まれたほうが、より質の高いものができる。	・「滋賀県には、他府県にはない豊かな自然や、環境学習や環境保全活動に関する長年の取り組みの蓄積があります。これらの蓄積にさらに磨きをかけ、未来に向けてどう活用していくかを、あらゆる主体がそれぞれの活動の中で考えていくことが大切です。」を追記 (P. 13)

## ○ 第5回環境学習小委員会（平成25年8月30日）における主な意見

### ■ 世代のつながりについて

- 世代のつながり（世代間および世代内）を達成するために、その手段として場、人、問題のつながりがある。さらに、社会づくりのために主体のつながりがある。(P. 6)
- 文中のタイトルのつけ方を工夫すること。(P. 6)

### ■ 食や流域とのつながりについて

- 流域のことを具体的に考えるのが難しいことから、流域という点で何かわかりやすい事例を記載できないか。(P. 7)
- 問題のつながり内の食に関する記載部分で、外国産のものではなく、地産地消のものを進めていく意義について、地球温暖化のことだけでなく、食の安全リスク（例えば農薬の利用）といったことがもう少し書ければ、問題のつながりを考える必要がわかりやすくなる。(P. 8)

### ■ 理念を具体化するための仕組みについて

- 具体化するための仕組みについては、各部署、それぞれの分野の検討の中で考えていく必要があることから、答申で示した方向性を具体化するための部分（環境総合計画等への反映）に、各課、各分野において実現化するよう努力を求め、といった文言を追記 (P. 13)
- 社会づくりというのは、人と人が支えあっているものであり、主体のつながりの部分、つまり、協働・連携の取組により社会づくりを進めていくということを加筆する。それぞれの取組を高め、かつ、主体がつながりあい、社会づくりを進めていくという流れを追記 (P. 8)
- 答申を計画に反映した後、具体的に計画がどこまで進み、成果があったのか、公表していくとよい。計画の進行管理において、一般の方にもPDCAサイクルに参加してもらえるような進行管理が必要。指標は評価だけでなく、PDCAにより、次の実践につなげていくことにも使える。(P. 13)

### ■ 「人づくり」について

- 「人づくり」という言葉に、気づく、学ぶ、考える、行動するという補足が付いており、人が育つ環境を作るという意味を踏まえての「人づくり」と理解する。(P. 5)

### ■ 滋賀らしさについて

- 本文中の様々な箇所滋賀らしさは出てきており、追記の必要はないだろう（全体）